

# イスラームの民

—アッラーが見つけた迷子の民—

安部大成

## 1

「1930年の7月4日から1934年6月30日まで、この預言者はデトロイトに住んでいたが、彼が『中東から来た』ということと、彼が北アメリカの黒人達にイスラームの民に入るよう『呼び掛けた』こと以外には、彼に關しては殆ど何も知られてはいない。」<sup>1)</sup>

『アメリカ社会学』誌(1937年7月号—1938年5月号)に掲載された論文で、ミシガン大学の社会学者ベイノンは黒人信者集団が信じる通りに彼等の預言者として記述した人物は、その生涯のうちで4か年に数日足りない間の僅かな事実しか外部には分らない。

しかし、彼から直接その教えを受けた弟子や信者達にはこの期間は劇的に充実した歲月であったであろうと想像される。

彼はデトロイトの黒人居住地の中でも、最も疲弊した地区に暮らす人々の戸口に行商人として立った。

彼の売り込みの口上は尋常のものではない。彼はアメリカ黒人の本来の祖国から来た者だと言い、販売している品物は彼等の先祖が暮らす国の人々が使っている物と同じであると言う<sup>2)</sup>。

この地区の人々はその殆どが、生れ育った南部の農村では生計が立たず、そこを逃れて来た、未だ帰属すべき所を持たない貧農の出であり、読み書きは不十分で、宇宙観も世界観も人生観もすべてが聖書を基にした素朴な説教の域を出ない、狭いものであった。

当然の事だが、彼等はその先祖が奴隷としてアフリカ大陸のどの国、どの民族、あるいは部族から連れ出されたのか知る由もない。その上長期に亘る奴隷制度の下で法的に家族を形成することなく、男女とその間に生じた子が白人所有主の動産として、家畜並に記録されただけで、彼等の間には血縁関係があっても法律上の姻戚関係はなく、彼等はその所有主である白人奴隷主に所有物として帰属した。

奴隷解放後、アメリカ市民となったが、白人社会は黒人を平等な市民として受け入れることを拒絶し、南部諸州の外に北部の一部の州に於いても、人種間結婚を法律で禁じていた。

南部には人種隔離制度が成立し、黒人は白人社会の下位に置かれ、居住区は分離されて、黒人地区に貧困状態で暮らしていた。北部では人種差別によって就労の機会と条件が不利で、黒人貧困地区が形成されていた。

だから、彼等には祖国と呼べるものはないのに等しかった。

都会に居ながら都会の便宜に与からず、商店すらない貧困の街に住む彼等には、この行商人が広げて見せる品物は、彼等が訪れるすべもない、豊かな世界が存在することを物語るようである。そして、その別世界が彼等黒人の本来の故郷だとこの行商人は言うのである。

食事時に及んで食卓に招かれると、体に毒になる食べ物を指摘して、それを食べることを禁じた。彼等の故国の人は、適切な種類の物を食べているから何時も最高の健康状態にあると言う<sup>3)</sup>。

貧しい彼等が古くから頼らざるを得なかった食べ物の材料は、穀物では主として粗挽きトウモロコシ、動物性食物は豚の内臓、狸、アヒル、ナマズで

これをあぶったりラードを使って料理した。

この種の食生活が原因で胃腸病や心臓病、リュウマチを患う者が多く、また憂さ晴らしに、安い、強度のアルコール類飲料を口にする者が多く、肝臓障害の外に精神障害を来す者も少なくなかった。

彼等には、その先祖の住む国があり、その国の人のように食べ物、飲み物を取捨選択すれば、彼等も心身の病を脱して健全な人生を享受できるといふ、このイスラム教の聖地メッカから来た行商人の話は、北部大都會の貧困の街で、路頭に迷う人々、我を見失った人々に訴えるものがあつた。

親族を集め彼を自宅に招いてこの中東から来た行商人の話を書く人が次第に増加するようになると、彼はこの人々をグループ分けし、積極的な協調者の自宅を会場にして集め、順次訪問し講話するようになった。彼等の多くは原理主義的色彩の濃い、黒人バプティスト派、またはメソヂスト派に属する人々であつたから、この種の形式の礼拝集会には慣れていた<sup>4)</sup>。

彼等は学校教育を受ける機会はなかつたが、聖書の教えるところにはまた慣れ親しんでいた。

日は東に昇り、西に沈む。我々は日常的にそのように認識している。その事と地球が自転しながら太陽の周囲を回るといふ科学的認識は矛盾しない。それは学校教育の所産である。

聖書には日の出と日没があるが、それは嘘だ、太陽は不動で、地球が自転しているのだと聞いてこれまでの宇宙観がひっくり返り、興奮して夕食が喉を通らず、真実を求めてその夜の集会に馳せ参じ、やがて改宗した男性の例をベイノン<sup>5)</sup>は紹介している。

この種の純朴な人もいれば、マーカス・ガーヴェイ運動に参加した民族運動の経験者、小作人として白人の借地で働く合間に、説教師の役を務めた人もいる。

これらの人々を集めて預言者は説く。

『私も、また 379 年もの間故国を失ったままでいる我が民も、このいわゆる神秘の神を信じて、パンと衣類と住家を求めて生きて来た。しかし、それをもって私達が今日手にしているのは、酷い目にあわされ、腹を空かし、着るものが無く、戸外に放り出されているだけだ。その上、この種の神を唱導する者達に殴られ、殺されて来たのだ。』<sup>6)</sup>

聖書の記述をそのまま受け入れる傾向の強い南部黒人社会層の出は彼等と同じキリスト教信仰に生きる白人から最も冷酷に扱われた社会層の出でもある。だから打てば響く。

黒人の家庭に入り込むことに成功したこの人物は、アメリカ黒人からキリスト教信仰を取り除くこと、そして世界でも特有の新たなイスラム教をアメリカ黒人の間に創出するために、その弟子を見つけ出すこと、これをアッラーに託された使命と自認していたように思われる。

上記の改宗した男性の妻が姻戚関係の女性らしいが、この預言者の初めての講話を聞いた数少ない信者の一人だが、彼が次のように言ったのを聞いている。

『私の名前は W. D. ファードである。聖都メッカから来た者である。これ以上のことは未だその時期ではないから、話すことはしない。』<sup>7)</sup>

これは、W. F. (=W. D. このことについては次頁引用文参照) ファードがデトロイトから姿を消してから 4 年後の、1938 年の夏の調査でベイノンが得た回答である。

W. F. ファードの弟子の一人で、彼が去った後、W. F. ファードをアッラーの化身と解釈し、W. F. ファードが率いていたイスラームの民よりもさらに好戦的な temple・people として知られる一派を立て、今日の教団イス

ラームの民を創設したイライジャ・ムハンマドは、1931年にイスラームの民に加わって、その姓名イライジャ・プールを改めた人であるから、同じことを聞いた筈である。

彼はジョージア州サンダーズヴィル近郊の刈り分け小作人の出であったが、生活に困窮して農作業を諦め、レンガ工場、その後は鉄道会社で働いたが、黒人を冷酷に扱う南部を去り、1926年デトロイトへ移住して、自動車工場で働いていた。

小作人でバプティスト派の説教師を務めていた父の感化と彼本来の性質であろうが信仰心が篤く、聖書を熟読していたので、イライジャ・プールは早い時期から、父に代わって説教師の役も務めていた。だから聖書には取り分け詳しくあった。

1965年に出版された書、『アメリカの黒<sup>ブラックマン</sup>人へのメッセージ』で、W.F. ファードについて彼は次のように述べた。

「アッラーは1930年、アラビアの聖地メッカから私達のところへ来られた。神は、しばしばW.F. ファードと署名されたが、ウォラスD. ファードという名前を使用された。3年目(1933年)には、ウォラス・ファード・ムハンマドを表すW.F. ムハンマドと署名された。」<sup>8)</sup>

聖書に通じ、信仰心の篤いキリスト教の説教師であった彼に、キリスト教を捨てさせ、イスラームの民に改宗させたW.F. ファードは、彼にとっては、紛れもない預言者であったのだが、そのW.F. ファードが去った後、彼はこの預言者を原理主義的認識と信仰心を基に、アッラーの化身と認識し、自らをその預言者と自覚したのである。W.F. ファードは「その時期が来れば話す」としたことをイライジャ・ムハンマドに託したのかも知れない。

イライジャ・ムハンマドに面会して質問したE. U. エシェン-ウドムは次のように言う。

「[イライジャ・]ムハンマドは、W.F. ファード師即ちウォラス・ファード・ムハンマドはアラビアのメッカから来られ、また国外追放の身になられた時、救世主〔Mahdi〕<sup>マハッジ</sup>に同伴して空港まで行ったと言う。

彼のこの説明以外にはプロフェト（預言者）ファードが誰であり、何処から来たのか、あるいは彼の身に何が起こったのか、それを証拠立てるものは何もない。」<sup>9)</sup>

イライジャ・ムハンマドが『最高の知恵』（1957年）で、

「W.F. ファードは迫害されて、1932年に投獄され、1933年5月26日ミシガン州デトロイト市から退去するよう命じられた。彼は同じ年にシカゴ市に来られ、直ぐに逮捕され、収監された。」<sup>10)</sup>

と述べているが、この命令を出したデトロイト市警察が同年月に撮ったW.F. ファードの正面と側面の顔写真が残されている<sup>11)</sup>。

ムハンマドは拘留所に身を置くW.F. ファードの指示を受けてデトロイトへ戻り、アッラー・テンプル・オブ・イスラーム No.1 の後継者となった。

イスラームの民はその信者の子供を教団が運営する独自の学校に入学させていたが、このことで、イスラームの民はミシガン州教育委員会と対立することになった。

1934年4月デトロイト市警察が委員会の要請で介入し、教員達を逮捕するに及んで事はイスラームの民と警察との対立に発展した。

イライジャ・ムハンマドは警察に出向き、彼の逮捕と引き換えに、教員達の釈放を求めた。

この時、ムハンマド逮捕の知らせを聞いて駆け付けた約700人の信者が警察署を取り囲み抗議した。警察は警棒を振るってこれにこたえ、彼等を警察署周辺から追い払ったが、これが暴動へと発展するのを恐れた当局は、半年

以内にイスラームの民の子供を公共の教育機関へ入学させることを条件に、起訴を取り下げ、ムハンマドと教員達を釈放した<sup>12)</sup>。

ムハンマドはこれを不服として、彼の家族を連れてシカゴ市へ移った。

この事件があつて間もない6月頃、W.F. ファードがシカゴ市から姿を消したとされる。

W.F. ファードは信者に聖書を含めて幾つか宗教、文明に関する書物を推薦し、これらが象徴的に表現するところを解釈することによつてのみ、真意が理解できると教え、彼自ら解釈の仕方を示したと言う。

イライジャ・ムハンマドはイスラムで言う救世主<sup>マハッヅ</sup>をコーランではなく聖書の記述を解釈して言う。

「黙示録で、預言者ヨハネは、天から（聖地から）、大いなる力を持って、一人の御使が降りて来るのを見た。そうすると地（いわゆる黒人<sup>ニグロ</sup>）は彼の栄光（知恵と真実の知識）によつて明るくされた。

この御使とは、この書で既に述べたところだが、まさに聖地メッカから来られた大救世主<sup>マハッヅ</sup>、W.F. ファードその人である。』<sup>13)</sup>

国外に去つたW.F. ファードをイライジャ・ムハンマドは、心身共に白人と白人文化の奴隷になり、その社会に受け入れてもらう日を待ち望んでいるアメリカ黒人を哀れんで、その本心に戻し、正しい道<sup>マハッヅ</sup>を歩ませるために、わざわざ黒人のところへ来られた救世主と認識した。

ルカによる福音書第15章第11節から第32節には、よく知られている通り、罪人が一人でも悔い改めると、その必要のない正しい九十九人よりも天の喜びは大きいことを譬えた話が三つある。

いなくなった一匹の羊を見つけ出した羊飼ひ、落とした銀貨一枚を拾ひ戻した女、そして、我に返つて帰郷した放蕩息子を出迎えて「死んでいたのに

生き返り、いなくなっていたのに見つかった」と喜ぶ父親のそれである。

W. F. ファードがイスラームの民を正式にはいなくなつて-見つけたイスラームの民 *The Lost-Found Nation of Islam* と呼んだのは、イライジャ・ムハンマドが説く通り、この挿話による。

彼は W. F. ファードとの出会いによって、自己と黒人とを救済する道を見つけ出したのであった。

この4カ年の間に W. F. ファードとその有力な弟子イライジャ・ムハンマドの呼び掛けに応じてイスラームの民になった者は、信者側の役員によれば約8千人、デトロイト市警察署の特別調査班は約5千人と推測している。

〔注〕

- 1) Erdmann Doane Beynon, *The Voodoo Cult among Negro Migrants in Detroit*, *The American Journal of Sociology*, Volume XLIII, May, 1938 (The University of Chicago Press), p. 896.
- 2) *Ibid.*, p. 905.
- 3) *Ibid.*, p. 905.
- 4) *Ibid.*, p. 895.
- 5) *Ibid.*, p. 896.
- 6) *Ibid.*, p. 898.
- 7) *Ibid.*, p. 896.
- 8) Elijah Muhammad, *Message to the Blackman in America* (Muhammad's Temple of Islam No. 2, 1965), p. 16.
- 9) E. U. Essien-Udom, *Black Nationalism* (Dell Publishing Co., Inc., 1964), p. 57.
- 10) Elijah Muhammad, *The Supreme Wisdom* (The National Newport News and Commentator, 1957), p. 15.
- 11) Kate Barrett, *Elijah Muhammad* (Chelsea House Publishers), p. 51.
- 12) *Ibid.*, p. 54.
- 13) Elijah Muhammad, *The Supreme Wisdom*, p. 48.



## 2

イスラームの民がミシガン州教育委員会・デトロイト市警察と衝突した翌年 1935 年 3 月 5 日、イライジャ・ムハンマドが再び戻ったイリノイ州シカゴで、彼が主宰するアッラー・テンプル・オブ・イスラームの信者達が関係する「法廷室騒乱事件」と呼ばれる事件が発生した。

1935 年 3 月 5 日、市警察本部の建物内にある裁判所の法廷室で行われる予定であった女性の裁判に、数十名の男女信者が公正な裁判を期待して、その傍聴と女性の護衛を兼ねて同行し、法廷室の席に着いていた。

隣室で聴取手続きを取っていたこの女性が、法廷室に陣取る仲間に、暗号の微笑を送ってこの件が不起訴となった旨伝達すると、一団は、そのきびきびとした軍隊式行動で、これはこれらの黒人イスラム教派の特色だが、退場すべく整然と後方の出口に向かって行進した。ところが証言聴取を受ける別の女性グループがいたために両者ももつれ合う状態になった。廷吏が、彼等の出口は後方ではなく、前方であると伝え、方向を変えさせようとした。

「何人かが押し戻された。廷吏が法廷室内での静粛を命令した。興奮した女性信者の一人が廷吏に向かって叫んだ。『眼鏡を外しなさい、鞭でぶつてやるから。』」<sup>1)</sup>

これをきっかけに法廷室は乱闘の場となった。

「この教派の男達は赤い弦月の印のついたフェルト帽を斜めに被って、その女性達が熱烈な宗教的興奮のもとに歌う『性悪の大狼を恐れる者が何処

にいる?』という歌の一節に混じって、『自由と正義を!』『進め同志よ、進め!』という叫び声と怒号の中で、法廷室を嵐のように突進した。』<sup>2)</sup>

場所は警察本部がある建物の中である。150名の警官と廷吏が棍棒とピストルの台尻を振るってこの乱闘を鎮圧したが、被害は警察と裁判所側の方が大きかった。

シカゴ警察の分署長が心臓麻痺で死亡、廷吏1名が重傷、警官12名、廷吏6名が打撲傷か切り傷を負った。武装した警官とこれによって掩護されている廷吏側の被害に比べて、信者側は2名が銃撃で負傷、20名が打撲傷か切り傷を負っただけである<sup>3)</sup>。

この騒乱事件で逮捕された43名はシカゴ市警察の調査で全員が、イライジャ・ムハンマドが主宰するアッラー・テンプル・オブ・イスラーム、即ちイスラームの民に所属することが判明した。

彼等は何故血を流したのか。彼等の敵は何であったのか。

イライジャ・ムハンマドは白人を悪魔、邪悪を愛する連中、黒人の敵と呼ぶが、決して黒人に対して白人と戦えとは言わない。彼は黒人に対してその敵、彼等を奴隷にした邪悪な人種、悪魔でなければ出来ないことをする白人と別れよと呼び掛けるのである。

「イスラーム<sup>4)</sup>はアッラーの真の宗教であり、これは正しいことを愛する人々と邪悪を愛する人々とをはっきり区別するものである。これは今日アッラーが邪悪を行う人々から正義の人々を引き離すために使っておられる宗教である。」<sup>5)</sup>

「いわゆる<sup>ニグロ</sup>黒人を彼等の奴隷主達の子供達から分離することは命令である。」<sup>6)</sup>

では悪魔、邪悪な行為を取る人々、黒人の自由と平和と権利を奪って来た敵である白人との戦いは誰が行うのかと問えば、彼はそれはアッラーが行われると言う。彼はイスラームの特徴を七つに分けて述べた中の最後の第七で言う。

「これは、それを信じる者をアッラーの力で実際に守って下さる唯一の宗教であり、アッラー（神）と悪魔との大聖戦、または最終戦を生き残る唯一の宗教である。」<sup>7)</sup>

悪魔との戦いはアッラーが行う。だから黒人には外に打ち勝たねばならない敵がある。彼が黒人の最悪の敵と規定するものは、黒人が白人に対して持っている恐怖心である。

「恐怖心は私達（いわゆる黒人達<sup>ニグロ</sup>）の最悪の敵である。だが、アッラーとその預言者に帰依することでこの恐怖心は取り除かれる。白人は私達の先祖が赤ん坊である頃に、彼等に恐怖心を植え付けたのだ、というのがアッラーの言葉である。哀れにもいわゆる黒人の胸は敵に対する恐怖心でいっぱいになっているから、うずくまっていて自分の救済に与かろうとはしない。……彼等も真実さえ教えてもらえば、もっと違った行動を取るだろう。」<sup>8)</sup>

彼は、イスラム教は恐怖心を取り除くから、人を恐れを知らぬ者にすると言う。しかしキリスト教黒人に改宗を迫ったり、敵意を持つ者に対して攻撃的になれとは決して言わない。

「聖なるコーランは『改宗を迫ること』を禁じている。またイスラム教徒は攻撃的な人であってはならないと教えている。しかし、戦いを仕掛けて

来る者達に対してはアッラーの道において戦えと教えている。(第2章第190節)

襲撃されたら私達が自らを防衛することは聖なる神の掟である。』<sup>9)</sup>

「法廷室騒乱事件」は、彼等に手を掛けた者、それが廷吏であれ、警官であれ、これを恐れず、反撃するというイスラームの民の信仰と行動規範を実践したものであった。

さて、ここで「法廷室騒乱事件」を起こした傍聴人と廷吏との関係を社会的役割と信仰心の面から検討したい。

この事件は、前年のデトロイト市警察を包囲した事件と共にイスラームの民に改宗あるいは入信した人々とその後そうする人々のタイプを決定する出来事であったと考えるからである。

この時期に南部諸州の片田舎からシカゴ市に移住して来た黒人は、白人地主や商人に搾取され、食べることに事欠いて土地を離れた貧農であった。1927年12月、19歳の時この大都市に移住して来て、レストランでの雑役仕事についたリチャード・ライトは、この都市で黒人社会を形成して来た人々について、次のように書いた。

「我が移民の流れは絶えることなく続き、1920年から1930年までの間にシカゴの黒人居住地帯の人口は12万5千にまで増加した。……

……土地に生きて土地を持たない私達。家族グループで何とかして、辛うじて生きて来た私達。……教会と葬儀組合の外に、いかなる組織にも所属したことの無い私達。200年の奴隷制度によって人格を駄目なものにしてしまって、後は自分でやりくりするように放り出された私達。——

私達が持つ能力・資質のすべてが試される世界、私達の気概を計る競争

という仕掛けの中に私達を投げ込む世界，そこへ移って来た時，私達はそれのような人々であった。」<sup>10)</sup>

デトロイトの黒人居住地に暮らす人々も同様であっただろう。

法廷室に傍聴人としてやって来た黒人男女はこのような，大都会で生計が立たず，僅かな福祉手当にすがって，役所前に並ぶ，おどおどした貧しい，黒い市民の一群れと映ったのかも知れない。

女性を含む黒人の烏合の衆のような小グループが，社会の秩序を維持し法律を執行する武装した官憲に対して，徒手空拳で立ち向かって来るなど予想もしない出来事であっただろう。当然のこと驚愕と動揺，緊張と興奮が生じる。

彼等には，法廷室から退場する傍聴人という社会的次元の現実，廷吏に手を掛けられ押し返されたことによって，白い「大きな狼」に遭遇したイスラームの民という宗教的次元に一転する。

悪魔との大いなる聖戦はアッラーがなさるが，その信者に対する攻撃には信者自身がアッラーの道において反撃する。

官憲は秩序を乱す傍聴人を取り押さえるという社会的役割を遂行するが，この傍聴人は黒人である。だからこの役割の遂行に，黒人に対する偏見が加わる。偏見は現実の動きを有りのままに見ないから，規制行動に混乱が生じる。

結局は事件は死を恐れぬ手ごわい信者集団の存在を顕示する結果となる。

イスラームの民も外の黒人イスラム教派の団体も頻繁に警察の搜索の対象となり，その信者やメンバーは厳しい試練にさらされるが，

「これらの迫害は当然のことこれらの教派メンバー間により緊密な結束を

もたらすと共に、デトロイト黒人社会の住民からこれらのイスラム教徒をますます孤立させることになった。』<sup>11)</sup>

イスラームの民が孤立したのは、単に官憲との衝突だけが原因ではないことは言うまでもない。

最初、彼等がそこに居住しながらも孤立していたという黒人社会の人々は南部農村出の、彼等と同じ貧しい人々であった。

この人々が住まざるを得ない貸室は、白人が出た後の古い住宅の個室に簡易台所をくっつけたもので、便所一つの一軒家に30人あまりが住むという状態であった。

白人と同じ権利を持つ人間として、アメリカ社会に暮らすことを求めて止まない黒人達が、奴隷解放を実現させた北軍の地へ、最後の希望を託して移住し、行き着いた現実が、都市の白人社会から隔たった貧困に打ちひしがれた一角であった。

「簡易台所付き貸室は私達個人の人格に圧迫感と緊張感を注入し、多くの者達に人生の苦闘を諦めさせ、妻や夫を、さらには何とかやっていくために子供さえも後に残し、立ち去らせてしまうのであった。』<sup>12)</sup>

イスラームの民は元来、この人々の間から出た人達によって成り立っている。彼等はW.F.ファード、その後イライジャ・ムハンマドの教えを聞いて、この惨たんたる現実の圧迫を乗り越え、人格を再構築し、現状打開に成功した人達である。

彼等を黒人社会の人々と区別させる、時には孤立させるものは、その信仰と行動と生活様式である。

イスラームの民は信じる教理が異なるだけではない。彼等は改宗して団体

の登録メンバーになると改名がなされる。

アメリカ黒人の名前は奴隷主の名前であるから、これを捨てて、アッラーの聖なる特質を持つ名前に改めることがイスラームの民の第一歩である。

改めた名前は、イスラームの民のメンバーであることを外部に示し、それによってさらに自意識と帰属意識が強められ、この運動の目標達成に邁進することになる。

当時自動車工場の労働者であり、バプティスト派の説教師イライジャ・プールであった人が、改宗し、イライジャ・ムハンマドと命名され、やがて W.F. ファードの一番弟子となったのであった。

イスラム教への改宗は、キリスト教は白人の宗教であって黒人が信じるものではないとするからである。

彼等は奴隷制度の下で強制され、その後は人種隔離差別制度と差別の下で習慣化した隷属的生活状態と精神状態から脱却することをも目指す。

「イスラームは黒<sup>ブラックマン</sup>人を高貴なものにしてくれる。これは黒人を精神的にも肉体的にも清潔なものにして、黒人には初めて、自己の尊厳感を持たせるものである。」<sup>13)</sup>

毎日、必ず一回は洗身、あるいは入浴して、体を隅から隅までよく洗う。そして家を隅々まできちようめに掃除して清潔にする。

この外的行為を内的行為、即ち行としても実践し、自分の意識体験、行為を観察して、邪悪な思い、感情、また言動などを洗い落とし、精神と肉体との住家を清らかに、清潔にするように努める。

「それ〔イスラーム＝筆者挿入〕は何を食べ、何時食べるか、何を考え、いかに行動するかを教えることによって、肉体と精神とを共に治癒する。」<sup>14)</sup>

「一日三度食事することによって自分自身を食い殺すのを止めよ。一日に一度、しかも最も適切なものを食べよ。正しく食べることによって健康は最高の状態に保てる。……一日五回、顔を東に向けて祈れ。」<sup>15)</sup>

イスラームの民は穀物、野菜、果物、食用油から魚、動物の肉に至るまで、適切に取捨選択した食べ物のリストを用意し、集団的に健康な食生活を維持している。

外部からの妨害、襲撃に備えて自衛組織、男性の FOI と女性の MGTC<sup>16)</sup> があり、そこでは防衛術の訓練が肉体運動を兼ねて軍隊式に行われるから、イスラームの民の行動はきびきびしている。

彼等は勤労に励むから、収入は僅かであっても確実に入る。タバコとアルコール飲料を禁じ、適切な食べ物を一日一回摂取するから、出費は少なく、蓄えも出来る。運動と食生活は病気を防ぎ、医療費を抑える。

ベイノンの調査では、1930 年から 1934 年までの間に、彼等が初めて預言者 W.F. ファードに出会った時には、今信者になっている者はすべてが、失業者であって、デトロイトでも最も疲弊した黒人居住地に暮らし、その全員が福祉手当の受給者であった。

ところが、1937 年の調査時には失業者は一人も居らず、自動車工場や他の工場に就労しており、すべての者がその貧困地区を出て、黒人居住地でも一番経済的に恵まれた人達の地域で暮らしていた、と指摘している<sup>17)</sup>。

前述の法廷室騒乱事件で逮捕された 43 名のイスラームの民の入信者達はそのすべてがイリノイ州緊急救援委員会の援助を受けている人達であった<sup>18)</sup>。

このシカゴ市の人達も、デトロイトの仲間達と同様にその信仰心と行動と生活様式を持って、極貧状態を脱していたと考えられる。

イスラームの民の男性は白人企業の大企業自動車工場やその他の工場で働いた。彼等は他の黒人よりも優先的に採用され、その職を維持していた。



「雇用担当者は、不摂生、挫折、落胆などの様子が目立つ者達よりも、その服装や顔付が清潔な暮らしと独立独行の人であることの証となる人達を快く採用する傾向にある。」<sup>19)</sup>

白人が経営する工場で働き、収入を得る行為は、白人は悪魔であり、この悪魔との分離を主唱するイスラームの民の教理と矛盾を来さないのであろうか。

イスラームの民はその創立期から、彼等だけで暮らす土地を要求すると共に、公平な裁判と雇用の平等を求めて来た。これらの要求はその所信と共に、その後イスラームの民を代表する新聞『ムハンマド・スピークス』に於いて、今日では『ファイナル・コール』に於いて刊行ごとに簡条書で発表されている。その要求第七で言う。

「私達が私達独自の国家、または領地を設立することが認められない間、私達は合衆国の法律の下で、平等な司法を行うだけでなく雇用機会の平等を直ちに実施することを要求する。」<sup>20)</sup>

その所信第七で言う。

「……私達は独立した国民としてアメリカ市民を認め、これを尊重し、この国を治めるアメリカ市民の法律を尊重する。」<sup>21)</sup>

彼等はその教理と矛盾することなく、実直で、能率のいい、勤勉な労働者として自動車工場やその他の工場に職を見つけ、物的貧困と精神的カオスを抜け出していった。

北部大都会の黒人貧困地区の人々の間に播かれたイスラームの民の種子は、着実に黒人の間に根をおろし芽を吹いていたのである。

[注]

- 1) Essien-Udom, *op. cit.*, p.78.
- 2) *Ibid.*, p.79.
- 3) *Ibid.*, p.77.
- 4) W. F. ファードをアッラーの化身であったとするイライジャ・ムハンマドの説くアメリカ黒人特有のイスラム教をイスラームと記述して、この外のイスラム教と区別する。
- 5) Elijah Muhammad, *The Supreme Wisdom*, p.16.
- 6) *Ibid.*, p.41.
- 7) *Ibid.*, p.34.
- 8) *Ibid.*, p.15.
- 9) *Ibid.*, p.27.
- 10) Richard Wright, *12 Million Black Voices* (Arno Press, 1969), p.93.
- 11) Beynon, *op. cit.*, p.902.
- 12) Wright, *op. cit.*, p.109.
- 13) Elijah Muhammad, *op. cit.*, p.34.
- 14) *Ibid.*, p.34.
- 15) *Ibid.*, p.30.
- 16) FOI は Fruit Of Islam の略、「イスラームの果物」良い木には良い実がなる、つまりイスラームの教えで結ばれた良い果物を言う。教義の学習、精神と肉体の訓練、敏捷な行動を養い、柔道、空手、レスリング、ボクシングなど格闘技を取り入れた特有の防衛術を身に付けて、組織とそのメンバーを守る。登録メンバーの男性はすべて FOI として養成され、この中からイライジャ・ムハンマドやその外の要人を守る警護隊が組織される。  
MGTC は Muslim Girls Training Class の略。これは、教義学習、料理、家政の外は FOI の女性版である。
- 17) Beynon, *op. cit.*, p.905.
- 18) Essien-Udom, *op. cit.*, p.79.
- 19) Beynon, *op. cit.*, p.905.
- 20) *Muhammad Speaks*, July 31, 1962, quoted by Eric Lincoln, *The Black Muslim*, p.xxvii.
- 21) *The Final Call*, July 14, 1993, p.39.

### 3

1942年5月8日その教理に基づき、徴兵役登録を拒否したイライジャ・ムハンマドは、徴兵拒否とその教唆の罪で懲役5年の判決を受けミシガン州ミランの連邦懲罰矯正収容所に収監された。

「これはムハンマドが45年目の誕生日を迎えるちょうど5カ月前——もはや誰も軍務への参加を要求される年齢ではない時期であった。」<sup>1)</sup>

合衆国政府は分離国家を追求するイスラームの民を反国家団体と見なし、日米戦争の時期を見計らって、組織の壊滅を図ったと見られる。

多くの信者がその信条に基づき、その指導者と行動を共にして投獄され、その上シカゴ市のイスラーム第二アッラー寺が市警察と連邦警察の監視下に置かれることによって、事実上閉鎖状態になり、日米戦争終結後の遅い時期、1946年に彼が出所するまでイスラームの民運動は一時の衰退を余儀なくされた。

戦後アメリカ黒人は、民主主義を守る戦争に参加した実績を基に政府に黒人に対する公共面での差別撤廃を要求し、南部の各地で黒人市民を巻き込んで運動が繰り広げられ、社会の関心は人種統合運動に向けられていた。

しかし、白人と訣別するという黒人運動が存在することを、アメリカ政府も白人社会の支配層も忘れてはいなかった。

1959年の夏、ニューヨークのWNTA-TVはその番組ニュースビートで、マイク・ウォラスの「憎悪が生んだ憎悪」を放映した<sup>2)</sup>。

アメリカ白人社会一般が、また多くの黒人がイスラームの民の存在を知っ

たのは、この7月10日から17日にかけてのTVドキュメンタリーによる。

黒人が白人社会への統合を求める限り、黒人を恐れる必要はない。ところが白人と分離するという黒人集団が存在するのである。タイトルは社会の関心を喚起しようと狙ったらしく、センセショナルなものであった。

イライジャ・ムハンマドはこの種の非難や中傷をイスラームの民のしかるべき組織部門を通して耳にしていたであろう。

この放映に先立つ1959年5月12日午後、イライジャ・ムハンマドはワシントンD.C.のユーライン・アリーナで講話した。

喘息を患いアリゾナ州フェニックスを静養の地とするイライジャ・ムハンマドは61歳を過ぎていたが、若々しい、よく通る声で、一時間半あまり、時には間を取って、暫く呼吸の調節をするが、力強く弁舌を振るった。

聴衆の大歓声と響きのいい声でリズムカルにタイムリーよく支援の言葉を発する女性達、総立ちになった聴衆の拍手喝采にどよめく会場、当時の録音テープ<sup>3)</sup>を通して、その場面は彷彿と浮かび上がる。

彼は講話に先立って、先ず北アメリカの精神の荒廃した社会で迷子になり、精神が死んでしまった自分達を見つけ出し、生命を与えて下さったアッラーに感謝の言葉をささげた後、彼をこの地に招いたワシントンD.C.所在のイスラーム・ムハンマド第四寺の一同に礼を述べる。

続いて近隣、遠方、合衆国の各地から、数分間でもいい、彼に出会い、その言葉に耳を傾けようとこの会堂に集まって、彼に敬意を表してくれるイスラームの徒に礼を言い、他の宗教でなくイスラームの教えによつてのみ、皆が互いに愛し合い、仲良くなったことを称える。

そして最後に、首都警察総監とワシントンD.C.警察署に、彼とその一行を先導し、護衛してくれたことに謝意を述べる（聴衆は大喝采）。

そして、講話が始まる。

\*「私はワシントンの政府に物乞いをしに来たのではない。またワシント

ン大行進をやらせようとして、ここへ来たわけではない〔会場はクスクス笑い、以下会場の様子〕。』

講話の中の主要な部分を以下に記録した。

\*「私は真理をもたらすためにここへ来たのだ、いわゆる<sup>ニグロ</sup>黒人とその奴隷主との問題を説き明かして来たのだ〔拍手喝采〕。」

\*「400年前、私達の先祖がこの地に初めて陸揚げされた時、叫び求めたものは正義だった。私達の400年に及ぶ叫びはアッラーに達し、その教えの言葉は下ったが、私達はそれを受け取らなかった。」

黒人奴隷はキリスト教化され、その後は進んでこれを受け入れて、奴隷主と共にその信者になったから、アッラーの言葉を受け取る者はいなかった。

\*「何をやっても駄目であった。お前達は大いに騙されて、失望して来た。ただ駄目になっただけのことだ〔その通りです、と前列の方でこれを甘受する男性の低く穏やかな声〕。」

\*「キリスト教がお前達を駄目にしたのだ〔大歓声と拍手喝采〕。お前達の指導者とその宗教が失敗させたのだ〔大笑い〕。彼等のアメリカ政府がお前達を駄目にしたのだ〔大歓声と拍手喝采〕。」

黒人を代表する黒人国会議員が議会にいるが何の効果も得られない。正義を求め続けても何の効果もない。そのわけは

\*「それは正しい神にお願いしないからだ〔大歓声と拍手喝采〕。正しい神を知らないからだ。真理の宗教を知らないからだ〔この辺りから拍手、歓声の中に若い女性の弾みのある喝采が聞こえるようになる〕。お前達が失敗したのは、誰

が神であって、誰が悪魔であるかを知らなかったからだ [笑いから歓声と大拍手]。お前達は自分自身が誰であるのかを全く知らなかった。だから長い間さまよい歩いて、この上もない破滅に出くわしたのだ。]

真理は人を自由にする、とイエスは言われた。その通りだが、問題はどんな真理が私達を自由にするかである。その真理を知らないで自由になれるわけがない。

\*「預言によれば、真理は社会のぬかるみに身を横たえる人々に啓示される。」

\*「イエスが明らかにしようと苦闘した真理とは、神が彼に明らかにさせようとしたことを伝えようとイエスが苦闘したのは、真理はこの世の愚かなる者に啓示されるということであつた [数人の若い女性が響きのいい声で、分かりました！その通りです！と叫ぶ]。そして、お前達はその愚か者なのだ [声のない拍手だけ鳴り響く]。]

彼の雄弁に歓喜するイスラームの民信者や共鳴者には、白人憎悪の気配など感じ取れない。

お前達は馬鹿だ、愚かだとイライジャ・ムハンマドに言われて納得し、自らの過去の非を指摘されて口をつぐみ、ただ拍手してその指摘を受け入れるこの人々を白人憎悪集団と見るのはパラノイアと呼ぶ外あるまい。

\*「気を悪くするんじゃないぞ。お前達は聖書で言う愚か者だ [二三の笑い声]。]

\*「お前達は神にとっては、貴重な人々だ [笑い声]。お前達はこの文明の世の中で一番困った、厄介な人間だ。」

\*「お前達は真理と神の本性である正義を受け入れなければならない。」

\*「私はお前達に真理と正義を伝えに来たのだ。」

\*「キリスト教は白人の宗教だ〔大喝采〕。お前達にも私にも何の関係もないものだ〔大歓声と拍手が暫く鳴り止まない〕。そんなものは正義などもたらしはしない。」

\*「私もお前達も自己と神と悪魔とに関する知識なしには悲惨な状態に置かれることになる。」

白人の黒人に対する不法行為を指摘したり、訴えたり、抗議したり、批判するとその黒人はトラブルメーカーとされ、共産主義者、人種差別者と呼んで非難される。

\*「私が教えようとしていることの何をもって人種主義だと言い、私を酷評するのだ。人に人種憎悪とはどんなものかを教えるために、白人が私とお前達に対して行った400年を超える人種憎悪の例を語らせておいて、どうして白人は私の教えを人種主義と言えるのだ〔総立ちの拍手と喝采〕。」

\*「今日私が黒人に教えていることは憎悪されている。そして、お前は何たる人種主義者なのだとされている。しかし、私は白人の本当のことを話しているのだ。それは私が知らなかった真実なのだ。神のみが白人の真実を知っておられる。私が学んで知ったのではなく、神がそれを私に啓示されたのだ。だから、白人は神と争ったらいいのだ！〔大歓声と拍手喝采〕」

大統領府があり、大統領の記念碑が立ち、国会議事堂のある合衆国の首都ワシントンD.C.で彼は、黒人がいかなる扱いを受けても依然として白人を頼みとし、事態の改善を乞う、黒人の白人依存意識と態度に揺さぶりをかけ、自覚を促し、黒人が自立の道を歩むことを要求する。

\*「アブラハム・リンカーンはお前達の友人ではない。国を統一するため万

策つきて奴隷を解き放ったのだ。だが、お前達はそれで幸運だった。リンカーンが解放しなかったら、お前達は今でも奴隷のままにいたろう [笑い声]。ジョージ・ワシントンがお前の友人でないと同様にアブラハム・リンカーンは友人ではない [大歓声と拍手喝采]。]

\*「私達はこの国が関与した戦争に参加し世界の各地に出向いては白人を殺した。それはアメリカ白人の敵だからだ。多くの黒人が国内で白人にリンチ殺害されても、自分達のためには何もしないじゃないか。」

\*「私達は私達を大事にしなければならない。黒人の男は黒人の女性を大事にし、これを守らなければならない。白人は白人を大事にする。白人の男は白人の女性を守る。どうして黒人は自分の女性を守ろうとしないのだ [女性の笑い声]。」

黒人は彼等を低く、冷酷に扱う白人に正義や平等を求めて失敗したのだから、その愚を繰り返すのを止めて、白人と袂を分かち、黒人同士がお互いに愛し合い尊敬し合って、自立の道を歩み、黒人の国を作ることを考えようと言う。

イライジャ・ムハンマドがシカゴ市やデトロイト市ではなく、首都ワシントン D.C. に出向いて行ったこの5月の大講話会が恐らくその2カ月後のTVドキュメンタリー放映のきっかけとなったのかも知れない。

TV放映に続いて有力紙誌——『タイム』をはじめ、『ニューズ・アンド・ワールド・レポート』、『リーダーズ・ダイジェスト』、『ニューヨーク・タイムズ』などがイスラームの民を取り上げたが、その扱いは一般に否定的なものであって、黒人至上主義、または反アメリカ的で反ユダヤ主義的だと言うのが大半であった<sup>4)</sup>。

マスメディアはイライジャ・ムハンマドを晒し者にして、その影響力を削ごうとしたのであろうが、彼を信奉する者の数は倍増する結果となった<sup>5)</sup>。



〔注〕

- 1) Kate Barrett, *Elijah Muhammad* (Chelsea House Publishers, 1990), p.59.
- 2) C. Eric Lincoln, *The Black Muslims in America* (Kayode Publications, Ltd, Queens, New York, 1991), Chapter 5, side note 12, p.288.
- 3) Audio Tape: *The Historic Uline Arena Address* by The Honorable Elijah Muhammad Delivered at Uline Arena, Tuesday, May 12, 1959, Washington, D.C.
- 4) Essien-Udom, *op. cit.*, pp.85-86.
- 5) Lincoln, *op. cit.*, p.113.

## 4

イライジャ・ムハンマドとイスラームの民メンバーと信者が徴兵拒否で入獄し、壊滅状態になった組織は、イライジャ・ムハンマドの妻クララ・ムハンマドを中心に女性メンバーと信者の手で維持された。

1946年、連邦刑罰矯正収容所から釈放されたイライジャ・ムハンマドは、獄中での思考思索を基に、イスラームの民の新たな運動として、社会に見捨てられた人々——非行青少年、売春婦、元受刑者、麻薬中毒者など——の救済と就職斡旋に力を入れることになり、この運動は効果を上げた。その影響でイスラームの民は勢力を回復し、1950年代の終り頃に最大の増加を見るが、この15年足らずのうちに組織メンバーが8万名を超えるまでに成長する<sup>1)</sup>。

「私は国中の拘置所や矯正施設の受刑者から、たくさん手紙を受け取っている。この人達はイスラームを受け入れたいといういわゆる<sup>ニグロ</sup>黒人である。

こういう人達はその奴隷の名前を私達のところに送付すれば、我がイスラーム寺に登録されているイスラーム信者の名前に加えるように、便宜を図ることをここに記しておこう。後ほど、自由の身になったら、直ちに最寄りのイスラーム寺に出頭し、正式に自身自身がそのメンバーであるところ

ろの気高いイスラームの民に加わるとよい。]<sup>2</sup>

イライジャ・ムハンマドの刑務所布教で入信し、マルコム X と改名した人物は有名である。

当時、人々はこの団体をイスラームの民とは呼ばず、ブラック・ムスリムと呼んでいた。

1964年6月ネブラスカ大学を卒業した後、留学生はアメリカ社会の実地研修として1カ年半の就職が可能であったので、私(安部)はネブラスカ州刑務所に刑務官として勤務した。

ここにはかなりの数の黒人受刑者がいて、独房からなる監房棟の中で人種別に収監されていた。人種隔離だという批判があったが、受刑者を安全に管理するための処置だと、州懲罰矯正局はこれをつっぱねていた。

1965年の暮れ近い頃、若い黒人の受刑者が、ブラック・ムスリムをどう思うかとさりげなく問うので、人種統合を白人が嫌がるなら、分かれた方がいい、ブラック・ムスリムはいいこと言っている、と答えた。このことが黒人受刑者の間で取り沙汰されたようであった。

何日か経ったある日、この受刑者が鉄格子ドアの開くのを待っているところで出会うと、床を掃いていた別の黒人受刑者が、さっと私の近くにやって来て私の足元辺りを掃きながら、この若い男に合図した。

若い男は開いたドアから次のドアの前に移りながら、近くにいる白人刑務官を気にしたのかブラックの部分を言わずに、ムスリムは正しいと思うか、と私に尋ねた。私はそう思うと答えた。

若い受刑者はこの掃除係の男に、今のを聞いただけだろうと言って確かめると、この男はそれを確認した。

ある時、正午の人員点検の最中に、指令部から緊急連絡があつて、黒人監房棟の統制がとれないから手助けしてやってくれ、と言う。

行って見ると受刑者は、白人刑務官の命令を無視して各自の独房に入ろう

とはせず、一階から三階までの通路に立って楽し気に談笑し、中には奇声を発する者もいて騒然としていた。

彼等の何人かが私を認めると、エイブ（Abe、安部のこと）が来たぞ、と言うささやきが伝わって談笑が消え、彼等は整然と縦一列に並んで点検を受ける体勢を整えた。そして合図と共に一斉に独房に入り、鉄製の格子戸が閉まった。

頭数を数えながら通路を進むと、彼等は鉄格子の間近に、直立不動の姿勢を取って積極的に点検に協力した。

ブラック・ムスリムに関心を持ち、それを否認しない人間として、彼等は私に一定の敬意を表してくれたのだとしか思いようがなかった。彼等の私に対する態度は私が退職するまで変わらなかった。このことはアメリカの生活で忘れることのない出来事の一つとなった。

1966年2月26日、テレビをつけると、演壇から聴衆に向かって口を開くイライジャ・ムハンマドの顔が大写しになり、「白人はお前達の友人じゃない、忘れるんじゃないぞ……」と目元に笑みの感じられる表情で、静かに厳しく諭すように語る声が流れ、次いでその前後、左右に配置されたボディガードの屈強な容姿が映し出された。その日はイスラームの民の全国大会が行われる「救世主生誕記念日」であった。

イライジャ・ムハンマドの生前の姿を見たのはこれが最初で、最後だった。

1975年、アメリカ黒人の月刊誌 *Black World* の5月号の一頁に縁無し of イライジャ・ムハンマドの遺影が掲げられ、その左の頁には彼の生前の偉業を称える詩が黒枠の内に納めてあった。

黒人詩人ザック・ギルバートが称えていた<sup>3)</sup>。

あなたの教えを受けて私どもは  
酒を断ち、

マリワナ・タバコにも、  
また麻薬注射の針にも手を出さなくなりました。

.....

あなたの教えを受けて私どもは  
お互いを尊敬するようになり、  
女性を追い回し、冒瀆するのをやめました。  
あなたは  
黒人が育んで来た本来の愛の核心に、  
私どもを連れ戻して下さいました。

物言わぬ大勢の黒人を代弁して、ギルバートは詩に託してイライジャ・ムハンマドに感謝する。

勿論のこと、泥沼に堕ちたすべての黒人が救済されたのではない。彼の教えを受け入れた人々だけが、救済されたと言うよりも、自らを救ったのだ。

人種差別に打ちひしがれて身を堕した人々、貧困との絶え間ない苦闘の中で心身を枯渇させた人々、不当な処遇を被ることの多い人生を恨み、自暴自棄になった人々、この中から犯罪者となり服役者となった人々、この泥沼にあえぐ人々にこそアッラーの真理は啓示されるとイライジャ・ムハンマドは信じたところを実践した。

では実際にも、また精神的にも泥沼に堕ちて、そこから立ち上がった人々とはどのような人々なのだろうか。

本学が与えてくれた1993年度の国外留学の折りに、ミズーリ州セントルイス市にあるイスラームの民情情報センターを訪ねる機会に恵まれた。

それはコンプトン通とオーリーブ大通の交差点の東を1ブロック進んだカードィナル通の北側にあった。かつて栄えた地域であったが、ビルを壊した跡の残る空き地と、半ば壊されたレンガ建ての空き家が近くにあった。

イスラームの民情情報センターは社会の泥沼に堕ちた人々を助け出すため

にそれに相応しい場所にあった。

留学前に、ビデオ・テープで、シスター・エヴァ・ムハンマドが、イスラームの民は、その祖先が自分自身に関する知識と独自の言葉と神と宗教を奪われた奴隷であり、解放後は残虐極まり無い処遇を受けた黒人のためのものだという趣旨の講話<sup>4)</sup>をするのを聴いたことがあった。

だからイスラームの民情報センターを訪ねても引き取らざるを得ないかも知れないと思っていた。

初めて訪ねた時、スーツに蝶ネクタイをした、身の引締まった精悍な FOI が三人いて、その一人に、どうして日本にイスラームの民が必要なのだ、と問われた。

とっさに良い言葉が浮かんだので言った。

「イライジャ・ムハンマド尊師は日本人は黒人の半兄弟だ<sup>5)</sup>とっておられます。黒人は茶人、黄人の兄弟だ<sup>6)</sup>とも。だから訪ねて来たのです。」

私の一番近くにいた FOI がさっとカウンター越しに手を差し延べた。ずいぶん背の高い若者だった。ボウマン X と名乗った。質問したのはレジナード 2X でこの長であった。もう一人はダイヤモンド X であった。

1994 年 6 月、グレン X からイスラームの民の機関誌『ザ・ファイナル・コール』が送付されて来た。

ルイス・ファラカーン師の次に位すると見られていた人物カリッド・ムハンマドがイスラームの民を除名処分になった男に撃たれた事件を報じるものであった<sup>7)</sup>。

カリッド・ムハンマドは 5 月 29 日、カリフォルニア大学リヴァーサイド校の学生会館前で講演会后、参加者の質問に応じていた時、聴衆に紛れ込んで接近して来た男に 4 メートルあまりの至近距離から自動小銃で撃たれ、左足に重傷を負った。

彼には FOI の外に主催者、合同黒人学生組織 UBSO のボディーガードがついていた。銃声と共にボディーガードは彼を地面に押し倒して、その上を

彼等の体で覆って弾丸を防いだ。

FOIの一名が背中、もう一名が脇腹を、UBSOの一名が右肩後部と両足、もう一名が左肩後部二カ所を撃たれた。彼等は全員重傷を負ったが、無事だった。このような例は幾つもあるが、徒手空拳で自衛するFOIとイスラームの民の本当の信者はまさに死を恐れない人々であることを物語っている。

UBSOは、イスラームの民に共鳴して黒人ギャング組織ブラッドとクリップズを脱退したグループが地域改善のために結成した団体である。

「ブラック・ムスリム」という新語を作った黒人の社会学者エリック・リンカーンはその著『アメリカのブラック・ムスリム達』に於いて、イスラームの民が受刑者や犯罪人の改宗に成功する大きな理由として、大衆運動が犯罪者の必要とするものを満たす傾向がある、というエリック・ホッファーの見解を紹介している<sup>8)</sup>。

「聖なる目標を抱く犯罪者は、生命と財産を尊いものとする人々よりも進んで命を賭けて極端なことをやってのけるというのは恐らく間違いあるまい。」<sup>9)</sup>

ホッファーがここで言う犯罪者は自己変革を遂げて運動団体のメンバーになるのではなく、犯罪者のままで、社会運動や革命運動がもたらす騒乱の中で行動する人間のことである。従って、イスラームの民に入信して、犯罪者から法を遵守する市民に変わる人間とは別である。

リンカーンはイスラームの民の結束力をホッファーが言う憎悪に求めるが、次の引用部分は誤解を生む恐れがある。

「憎悪はあらゆる統一要素の中で最も手近にあつて、幅広く利用できるものである。……大衆運動は神への信仰心なしでもこれを起こし、広めるこ

とができるが、悪魔の存在を信じなければ、これは不可能である。』<sup>10)</sup>

「自己本位に根差す憎悪も残虐さも無私から生じる恨みと冷酷さに比べれば効果のないものである。』<sup>11)</sup>

この部分を以てイスラームの民を見ると、それは白人「悪魔」に対する憎悪を説くことで運動を広げ、組織の結束を計る団体という印象を与え勝ちである。

イスラームの民が、詩人ギルバートが称えるような効果を上げる決定的な要因の一つはホッファーがその著『本当の信者』で項目の第七に論じてるところにあると考えられる。

「大衆運動が訴えるものは実利的組織体のそれとは根本的に異なるところにある。実利的組織体は自己開発の機会を与え、主として自己利益に訴える。他方、大衆運動は、こうあって欲しくない自己を取り除きたいと切望している人々に訴える。……

自分達の人生を取り返しがつかない程損われてしまったと見る人達には自己開発は価値ある目的にはならない。……

彼等の内奥にある切なる願いは新しい人生を手にする事——生まれ変わる事——にあり、または、あるいはこれに失敗すれば、ある聖なる大義に共鳴して行動を共にし、誇り、自信、希望、目的意識、仕事といった新たな人生の基本要素を獲得する機会を手にする事である。』<sup>12)</sup>

イライジャ・ムハンマドが泥沼に堕ちた人々と呼んだのはこのような人達であったと言えよう。デトロイトの貧困に打ちひしがれた黒人街を訪ね、特有のイスラームの教えを述べた W.F. ファードをアッラーの化身と神格化し、自らをその預言者と任じたイライジャ・ムハンマドが多くの黒人を泥沼

から救い出した事実を見逃すことはできない。

(完)

〔注〕

- 1) Barrett, *op. cit.*, p.67.
- 2) Elijah Muhammad, *The Supreme Wisdom*, p. 49.
- 3) *Black World*, May 1975, p.28.
- 4) Videocassette, *A Proposition for Separation*, March 18, 1990, Mosque Maryan, Chicago, IL. Speaker Louis Farrakhan (A Final Call, Inc., 1990).
- 5) Elijah Muhammad, *The Fall of America* (Muhammad's Temple of Islam No.2, 1973), p.72.
- 6) *Ibid.*, pp.122-123.
- 7) *The Final Call*, June 22, 1994, pp.3, 8, 9, 33.
- 8) Lincoln, *op. cit.*, p.85.
- 9) Eric Hoffer, *The True Believer* (Harper & Brothers, New York, 1951), p.53.
- 10) *Ibid.*, p.89.
- 11) *Ibid.*, p.98.
- 12) *Ibid.*, p.12.